

# 標準的なバス情報フォーマットによる公共交通オープンデータの推進

## 標準的なバス情報フォーマット広め隊

連絡先：伊藤昌毅(東京大学 生産技術研究所) mito@iis.u-tokyo.ac.jp

2017年3月に国土交通省から公開された「標準的なバス情報フォーマット」を採用したオープンデータの公開が全国で相次いでいます。スマートフォン利用者向けに始まったデジタル化の動きは、交通事業者の業務のデジタル化、既存の乗換案内サービスやITベンダーの進化、さらには交通行政のデジタル化への期待へと繋がってきています。

### 標準的なバス情報フォーマットの広がり

1.5年の試行錯誤を経てのベストプラクティス

#### 1. 交通事業者自身によるデータ作成

外部のIT事業者などに委託するより、交通事業者自身がデータ作成を行う技術を持つべき

#### 2. 「その筋屋」など高度なツールの利用

Excelなどの簡易なツールより、ダイヤ編成が出来る高度なツールの利用が望ましい

#### 3. 静的・動的データの一体整備

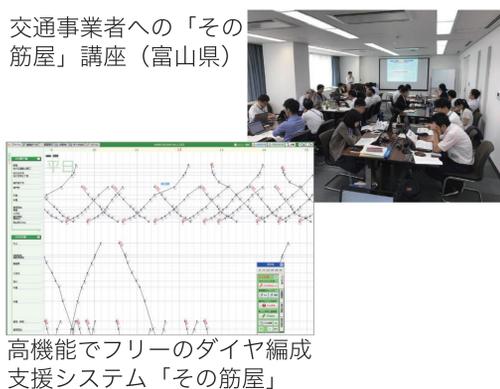
バスロケを導入する予定があるのなら最初から一体的にデータを整備することが望ましい



## フォーマットの普及が進化を促す

### バス事業者：業務のデジタル化へ

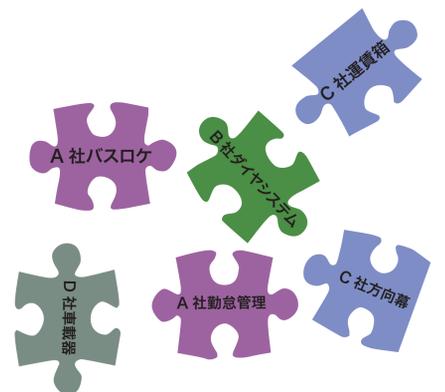
高品質なGTFSデータを継続的に提供するためには、交通事業者が業務としてダイヤやバス停、運賃情報などをデジタルで一括管理し、日々の業務の中で利用・更新する必要性が認識されています。



交通事業者への「その筋屋」講座(富山県)  
高機能でフリーのダイヤ編成支援システム「その筋屋」

### ITベンダー：囲い込みから相互運用性へ

バスロケやサイネージ、運賃箱やダイヤシステムなどが、標準仕様に対応することで相互運用が可能になり、競争や開発リソースの集中で製品やサービスの品質が向上することが期待されています。



### 乗換案内：リアルタイム交通メディアへ

バスロケの情報や台風やイベントによる運行情報など、バス事業者が随時発信する情報を迅速に利用者に届けられる、リアルタイム交通情報提供メディアになることが期待されています。



Googleマップによるリアルタイムデータの表示例

### 交通行政：届出のデジタル化と活用へ

運輸局への届出など、未だ残る紙とハンコのシステムをデジタル化する必要があります。また、路線の評価や見直しなどの際にもオープンデータを活用することが期待されています。

